

# 「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0549 ◆◆◆

19/09/04

## 【 8月相場は経験則通り、足もと9月も期待される「大相場」 】

先週末に終了した8月相場は、2つの意味で過去の経験則通りの展開だった。すなわち、「円高有利」あるいは「クロスを含めた円全面高」と「動くときには大きく動く」ーが見事の中した格好になる。そんな8月相場を受けた、足もと9月相場の変動は果たしてどうなるのか。今回の当レターでは恒例になっている過去の経験則を参考に、以下で考えてみたい。金融市場で取り沙汰されることのある格言(!?)、「ハリケーンシーズンの為替相場は荒れ易い」のように、ドル/円相場は2ヵ月連続の大相場をたどるのか否かにまずは注目だ。

### ◎「ハリケーンシーズンは荒れ易い」ーが、今年は果たして如何に!?

経験則を参考に、最初に1990年以降過去29年間の9月相場の勝敗表を調べてみると、15勝14敗となっている。ほぼ互角の内容で、特徴とは言えないだろう。ただ、そんな9月相場には、別の大きな特徴が見られている。それが「ほかの月に比べて大きな値幅が観測されることが少なくない」ーとすることだ。

「月間を通して大きく動く」という9月相場の典型例は月間に11.15円動いた(年間3位の大変動、以下同)1998年のケースだろうが、そのほかでも1999年は8.20円(同4位)、2002年の7.41円(同4位)、2003年の7.63円(同1位)、2005年の4.94円(同2位)、2014年の5.76円(同4位)、2017年の5.94円(同2位)ーなどといったように枚挙に暇がない。さらに、上記を見てもわかるように、「9月の大相場」は2000年以降、つまり比較的最近に多く起こっていることがみてとれる。インターバンクディーラーなどのあいだでは、予てから良く知られている話として、「ハリケーンシーズンの為替相場は荒れ易い」と言われているが、過去の9月相場の荒れ模様をみると、経験則的にもある程度立証できると言ってもよいのかもしれない。そんな経験則もあり、先月に続く2ヵ月連続の大相場を期待する向きは筆者だけではないのだろう。

一方、為替の動きは一旦棚上げし、過去の9月をニュースの視点でみてみると、何故か金融関係の重大事件の起こりやすいことが知られている。実際に幾つか例を挙げると、「プラザ合意(1985年)」を筆頭に、「いわゆるブラック・フライデーが起こる(1986年)」「英ポンドとイリラがERMと呼ばれた当時の欧州通貨のバンド制から離脱(1992年)」「大手ヘッジファンドLTCMの巨額損失発覚(1998年)」「リーマンブラザーズ破たん(2008年)」ーなどとなる。

また、金融に直接は関係ない大事件、それも紛争や戦争に関するものも少なくない。こちらにも実例を挙げれば、古くは「関ヶ原の戦い(1600年)」や「清英でアヘン戦争(1839年)」「マッキンレー米大統領狙撃事件(1901年)」「日露戦争終結(1905年)」「第二次世界大戦はじまる(1939年)」ーなど。比較的最近では「イラン・イラクが全面戦争へ(1980年)」「米国同時多発テロ(2001年)」が、やはり9月に起こっている。

もちろん、こうした事象は毎年確実に起こると言うわけではない。しかし、改めて指摘するまでもなく、最近の世界情勢は本当に不安定だ。たとえば、近隣であるアジア情勢をざっと見渡しただけでも、大規模デモが続く「香港」のほか、それも含めた「米中」関係、あるいは関係が再び悪化しつつある感のうかがえる「米朝」や「米韓」などへの懸念も高まりつつある。また、欧州に目を向ければ英国を筆頭にイタリアやドイツ、スペインなどで政治や経済的な不安が台頭、南米ではブラジルやアルゼンチンに関して気掛かりなニュースも取り沙汰されていた。突発的に何か大きな事件が今年の9月に起こっても、まったく驚くことではないのかもしれない。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

